

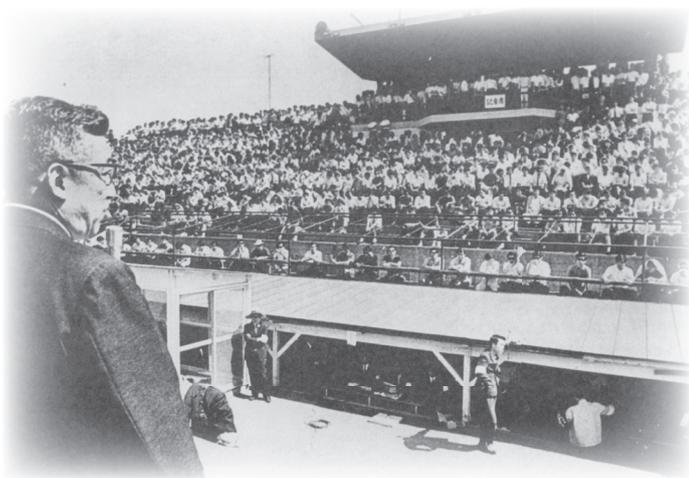


【第四回 (2015年3月11日)】

大学紛争の嵐を乗り越えて、新たな創造へ

平松 一夫

関西学院大学商学部教授・元学長



ご紹介いただきました平松でございます。今回、大学紛争をテーマに話すようにという依頼を受けました。即座にお引き受けしたものの、非常に大切に微妙なテーマですので、今となつては私がこのテーマでお話していいのかなという思いもでございます。

非常に微妙なテーマと申しましたのは、1960年代後半の大学紛争当時、大学紛争についてさまざまな立場があったからです。例えば全共闘は明らかに「左」寄り、私は関学を愛する中立的立場の一学生でしかなかったのに、一学生として関学を愛する立場で頑張れば頑張るほど全共闘から「右」寄り、右翼と見られるのです。それはそうですよね、ものすごく左から見たら中立は右にしか見えないので右翼になってしまいます。私にはそのつもりはなく、今でも自分自身の立場は中立であったと考えています。実際、右翼と名乗る方々が私たちに接近してきたりしましたが、おつきあいはせず、自分の立場で頑張ろうと思いました。後でも少し触れますが、私は友人と一緒にあって関学革新評議会というグループをつくりました。「革新」という文字が入っているので、同窓会の先輩に寄附をもらいに行ったら、先輩方から君は「左」かと言われたりしました。「左」だと寄附はもらえなかったと思います。これは一例に過ぎませんが、それほど「左」とか「右」とかが非常に微妙な問題を生じる時期でありました。

今日、皆様方にお渡ししたレジュメは、立場による色がつかないような形で作ったつもりです。淡々と事実を記載してあります。これまで例えば大学の講義などで大学紛争について話すときは、学生が相手ですから、できるだけ公正にと考え、特に全共闘の立場の人々に対して遠慮しながら話をしてきました。しかし、今日は自分の立場を前面に出しながら話をさせていただきたいと思います。自分の信じるところをお話をさせていただくということで、これからの話には私の主観が入ることについて、あらかじめお許しを得ておきたいと思います。これまでこのテーマで余り私の話をお聞きになってはいないと思いますので、今日はえらい「右」の話やったなということになるかもしれません。

I. 大学紛争（大学闘争）

1. 大学紛争（闘争）の時代

(1) 大学の大量化と大学紛争（闘争）

大学紛争が今日のテーマですが、全共闘からすれば大学紛争ではなくて大学闘争ということになります。この時代、一気に大学が大量化し、大学紛争が起こることになりました。

私は1960年に関西学院中学部に入学しました。1970年に大学の商学部を卒業して、そのあと5年間大学院に通ったわけです。私が中学部に入ってから大学2年生ぐらいまでは、関学は非常に平和な大学で、何の変化もありませんでした。一方で、日本の景気はよくて、経済的には発展しておりました。もちろん公害などの問題もありましたが、経済的には毎年所得が上がって生活が豊かになっていくのを実感しておりました。

それに伴って大学も大量化していきました。私が中学部に入ったときの大学生は全国で63万人でしたが、それが10年後には倍以上の140万人になるのです。一方で、関西学院は私が生徒・学生として過ごした1960年代を通して何も変わりませんでした。外部からは関西学院は変わらないなあと言われましたし、内部に身を置いている学生にとっても何も変わりませんでした。後にわかるのですが、その間に学内の民主化などは進められたようです。しかし、外部に向けた関西学院の働きかけは非常に弱い時代だったと私は思っています。

そんな経験から、私が学長になったときに、変革・改革をしなければ関西学院の成長はない

との思いから、新しいことに取り組もうとしたのです。そうすると拡大主義だと批判されたりしました。私がそうしないと関西学院は生き残れないと思ったのでやったことでも、学内には何もしないのが楽でいいという雰囲気がいっぱいでした。1960年代はもっとそうだったのだろうと思います。そんな関西学院が1960年代に発展し続けることができたのは、国全体の経済が高度成長期で上向きだったからです。大学は何もしなくても勝手に成長しているように見えただけです。しかしこの間、大学は同時にどんどん矛盾をはらんでいきました。これは関学だけの問題ではなく、日本の大学全体が抱えた問題でもありました。特に私立大学は、学費値上げや、学生寮・学生会館の管理問題など、さまざまな共通する課題を抱えておりました。

(2) 反体制運動の展開

当時、政治的には反体制運動が盛んで、全国の大学で見ますと100以上の大学が紛争に陥り、バリケード封鎖や大衆団交という用語がはやりました。ヘルメットをかぶり、左手に鉄パイプ、右手に火炎瓶を持つ。マスクをしているため、ヘルメットの人物が誰かがかわからないんですね。関学の全共闘の学生かと思ったら、「外人部隊」と呼ばれた他大学の学生だったりすることがよくありました。

この写真は朝日新聞に掲載されたもので、お顔が写っているのは古武弥生先生です。また、日本地図のようなものの上に、全国の多くの大学で紛争が起きていることが描かれています。このスライドには他にも小宮先生がマイク持って語っておられる写真や、中央芝生に大勢の学生が集まっている写真も見られますが、ここで見出しにありますように、「関学大 非常事態に」という表現がまさにぴったりの状況だったのです。



中央芝生での全学集会 / 1969.1.24

関学の紛争が新聞の1面トップに出ることもありました。

関学の紛争は全国的に見ても早くから起っていました。電車に乗っていますと多くの人が関学紛争の記事を読んでいたりました。大学紛争はまだ一般化していない時ですから、「一体関学はどうなってるんや」というのが一般的な見方だったようで、肩身の狭い思いをしました。そのうち東大紛争も大きくなって、東の東大、西の関学という状況になり、関学もいい学校なんや、というような感じで受け止められたりしました。なんとも奇妙な感じでした。

ちょっと前に戻らせていただきます。ご存じのとおり、当時は反体制運動が盛んで、ベトナム反戦、日米安保条約反対などの運動が起きました。そして、成田空港ができるころには反対運動で機動隊と衝突したり、東大の安田講堂が全共闘の学生に占拠されてそこに機動隊が入るといったことが頻繁にあったわけです。そういう時代背景があって、関西学院もそれに巻き込まれていったということでもあります。

(3) 関学紛争（闘争）の契機

関学の場合は、きっかけになりましたのが学費値上げです。その当時の学費は、1960年に入学金が3万円、授業料が2万6,000円、諸費が1万9,600円、合計7万5,600円で、現在の学費の10分の1程度ですから、今からみると随分安い感じですが。しかし、それが67年以降、例えば68年には入学金が倍増して6万円、授業料は3倍ぐらいになっています。諸費が2倍弱、そして合計が16万5,500円ですから、60年に比べると倍以上になっているのです。翌69

年にまた2年連続で学費値上げをして17万3,500円になったのです。倍以上の学費値上げですから、見方によればとんでもないことであります。紛争の背景にはこういうことがあったのです。ちなみに、今引き合いに出した金額は文系学部の学費で、理学部の学費はもう少し高かったです。



学費値上げに反対する学生集会／1967

改修される前の中央講堂に集まって学生集会を行っているところです。全共闘の学生は、「理事会は常務会案を白紙撤回せよ」という要求を出していました。こういった集会には学生がたくさん集まって、熱気むんむんの時代でありました。左下の写真は商学部の正面入り口です。ここに学費値上げ阻止ストライキを執行中という立て看板を立てて、教職員や一般学生が校舎内に入れないようにして

ました。右下の写真は旧社会学部校舎の玄関を全部封鎖しているところで、67年12月です。今の学生さんが見てもどこかわからないでしょうね。社会学部は結構早くからこういう状態になっていました。



授業料値上げ反対のストライキで封鎖された商学部／1967



ストライキで封鎖された社会学部／1967.12.16

学部でみると、まず文学部、社会学部、法学部、商学部の4つの学部の自治会がストライキに入りました。そして、このときに4学部の教授会が学生を処分したんですね。退学11人、停学15人の学生の処分を決定したということで、これがまた大変なことになりました。この処分に反対する学生70人が1968年3月28日の卒業式当日に、学院本部に入り込んで占拠しました。そして、当時の小宮隆院長と古武弥生学長を監禁したんですね。監禁する学生とそれに反対する学生の間で小競り合いが起きました。

そのうち乱闘騒ぎになり、そこで警察力導入という問題が起こります。警察を呼んだのです。大学で何か法に反するようなことがあったときでも、大学のキャンパスに安易に警察が入るようだと困りますが、大学といえども治外法権ではないわけで、乱闘でけが人が出たりした時でもキャンパスに警察が入ってはいけないというのはおかしいですね。従って、私などはこのときに警察力が導入されたのは仕方がなかったと思うのですけれども、それはいかんと言う学生も結構大勢いて、全共闘ももちろんそういう立場をとっていました。

学生処分はけしからんということが1つと、警察力導入はけしからんということで、紛争が一気に拡大したという背景があるわけですね。一方では経営のための学費値上げがあり、他方では警察力導入という非常に微妙な問題があった、端的に言うところこうしたことが引き金になって紛争になったと私は理解しております。

68年3月28日、私が2年生を終える頃の
写真です。時計台の前にいっぱい一般学生
がいて、中央芝生で全共闘の学生諸君がデ
モを繰り広げており、一部は本部に乱入し
て院長・学長を監禁したときです。この時
は学生もヘルメットをかぶっていないので、
少し様子が違ってきます。



全共闘学生によるデモ行進 / 1968.3.28 卒業式当日

2. 紛争（闘争）の発端

(1) 六項目要求

その年の11月に全学執行委員長が選出されて、12月に全共闘が結成され、六項目要求と言われる、後に関学で非常に有名になる要求を小宮院長に提出したんです。

その内容を簡潔に要約すると次のようになります。簡潔すぎてちょっとわかりにくいかもしれませんが、

- ① 68年、69年の「2年連続の学費値上げを白紙撤回せよ」と言っています。気持ちはわかるけれど、ちょっと無理な話です。
- ② 「不当処分を撤回せよ」。不当かどうかはわかりませんが、とにかくこれを撤回せよと言っています。
- ③ 「機動隊導入、捜査協力に対して自己批判せよ」。
- ④ 「文学部の学科制、全学的カリキュラム改編を白紙撤回せよ」。
- ⑤ 「学生会館の管理運営権を学生の手へ委ねよ」。当時学生会館は一部はすでに学生も一緒になって運営していたのですが、それを全部学生によこせということかと思えます。

そして、

- ⑥ 「上記5点について大衆団交に応じよ」という要求です。

この六項目要求はそれ以後しょっちゅう出てくる要求でした。しかし、これには1つとして聞き入れられるものがないわけですから、紛争がさらにややこしくなっていくのです。これに学院がどう回答したかですが、

- ①は、財政上やむを得ない決定であり撤回しない。こういう答えになるでしょうね。私は関西学院の理事でもあり、また大学評議会のメンバーでもありますが、学費値上げについては理事会の専決事項であると認識しています。理事会が慎重に決めてやっтерることなので、学生が要求したからといって、簡単に、ではやめますというわけにいかないですね。
- ②の処分は学部教授会の責任と権限であり、院長、理事会は干渉しないという答えを出しました。これも責任・権限としてはそうですね。六項目要求は院長に対する要求ですから、院長の回答としてはこういうふうになったということですね。
- ③の警察力導入につきましては、生命の危険が憂慮されたため、やむを得ない処置であった。刑事事件の捜査は拒否できなかった。えらい消極的なニュアンスになってますけれども、これもやむを得なかったということでもあります。
- ④文学部の学科改編、ちょっと個別になりますが全学のカリキュラムのことも含めての話です。これに対しては大学教育をよりよくするためのカリキュラム改編であり、学部教授会の努力の結果であるということで、全学の問題でもありますけど、文学部の問題については文学部教授会が真剣に考えた結果であるということです。これも当然といえば当然です。

⑤の学生会館ですけれども、これまで学生中心に運営されてきており、管理面で大学と学院が協力してきたと答えております。

⑥の「大衆団交に応じよ」ということに対して、既設の全学連絡会議で話し合う用意があると学院は答えています。これは大衆団交に応じる気はないということです。

このように、一応、六項目要求は全部拒否されたということですね。

(2) 学内施設の封鎖

学内諸施設も封鎖されていきます。その後、非常に大きな意味を持つのが第5別館の封鎖でした。第5別館は今より大きかったのです。今は一部が削られて小さくなっていますが、当時、屋上が平らで広く、後にここに全共闘がテントを張ったりして拠点にしたわけです。紛争末期には、裏にある上水道の手前あたりから、そのテントをめがけて機動隊が催涙弾を撃ちこむという、戦争みたいな光景が第5別館を中心に展開されたのです。また、機動隊員が第5別館内部を下から上がっていきこうとすると、全共闘が上から塩酸をぶっかけたり包丁で切りつけたりするという、非常に凄惨なことが行われました。首尾よく屋上にあがることのできた機動隊の1人が、屋上から落とされそうになるというか非常に怖いこともありました。私も上水道の方からそれを見ていて、ハラハラドキドキしていました。第5別館ではそういうことがあったのです。

(3) 大衆団交

学院本部はもとより、法学部校舎なども封鎖され、全学集会が1月に行われました。学生数は今より少なかったのですが、実に多くの教職員、学生が参加しました。このときには全共闘が500人もいました。これには外人部隊もいたと思います。一般学生は約5,000人が参加しました。5,000人といえば、当時の学生数の約半分ですよ。それほど関心が高かったのです。普段は関心の高い学生は少なく、ポリシーをもたないノンポリ学生が圧倒的に多かったですよ。学生の間では、全共闘と一部の関心の高い学生の対決のような構図がありました。もちろん教職員の中にも全共闘派とそうでない人がいました。執行部は反全共闘の立場ですから、入り組んだ形で戦いが行われていたのです。

集会が開かれると、全共闘はどうしても大衆団交に切りかえることを要求します。これは非常に危険なので、院長や当局者はそれは嫌って退席しました。後には、学生同士が残ってしまって、何かわけのわからない集会になってしまい、学生同士がごちゃごちゃになって喧嘩してるわけですね。その時の関西学院では学生が信頼関係で結ばれるということではなく、不信の渦という、混乱した状況にありました。

そうこうしていると、古武学長が急病で入院され、小宮院長が学長代理を兼任されました。いよいよ全学が封鎖されることになって試験ができなくなり、試験が延期されました。定期試験が延期されるとレポート試験に切りかわるんですね。一般学生の中にはこれを喜ぶ学生がいました。授業に出ていないから、試験があればダメだけど、レポートだったら大体全員が60点か70点もらえるのです。普通に試験を受けたら通らないけれどレポートやったら通るからいいとか、けしからん考えを持つ学生もいました。まじめに勉強してきた学生からすると、平素の勉強の成果を出そうと思っているのにレポートとは何事か、という思いがあるのです。けれどもこのときはまじめな意見の方が少数派でしたね。試験延期でレポート試験というのは、まじめにやってきた学生が涙を流し、そうでない学生が喜ぶという仕組みでした。

1月24日の集会のときの写真です。中央芝生が学生で埋まっています。普段は寝転べる芝生が、こういうふうになで溢れかえっている状態はめったにないですね。ちょっと写真が鮮明でないかもしれませんが、真ん中あたりにヘルメットが見えます。それが全共闘の学生です。



中央芝生での全学集会 (1969.1.24) / 1971 卒業アルバム

3. 紛争（闘争）の拡大

(1) 機動隊に守られた1969（昭和44）年入試

1969年の入試は忘れられません。このときは体育館も入学試験の会場だったのですが、前日に教職員が寝泊まりしているのをめがけて全共闘が午前5時に突入し、入試阻止を叫びながら火炎瓶を投げつけ、鉄パイプ・投石で教職員に襲いかかったのです。非常に重いけがをした人も出ました。これは大変なことですね。学生の中でも乱闘がありましたから、けがをした学生も大勢いますが、特にこのときには教職員の中にけが人が出たということでもあります。

だからといって入試をやめるわけにはいかないんです。東京大学はこの年の入試を中止しました。でも国立大学ですから潰れません。関西学院大学の場合は、この年に入試を取りやめたら学校財政が破綻しますからやめるわけにはいかない。そこで再び機動隊に守られて入試を行うという、やむを得ない措置をとったわけです。それで、全国の大学で初の機動隊に守られた異常入試ということで、これまた新聞でものすごく報道されるわけです。卒業生も含めて、一体どうなってんねんということで、肩身の狭い思いをされた卒業生も多いと思います。

広報も不十分で、卒業生からしたら関学で何が起きているかがわからないんですね。学校自体も内向きに対処することで精一杯ですから、同窓とか社会に向けての情報発信はスムーズではなかったですね。ですから、私などは、各地のさまざまな同窓会の集まりに出向いて行ったんです。卒業生の方からは、関学が一体どないなとるかさっぱりわからんということが大きな声として聞こえてきました。そこで、「関学革新評議会」という団体をつくっていた私たちは、『苦悩』というタイトルを付けた写真集を作成し、関学紛争がどのような経緯をたどってこうなったかを主に写真で示そうとしたのです。そして、ちゃっかり寄附をいただくのです。印刷代も要りますし、全学生に郵便物を送る郵送料もかかります。全共闘に石を投げられて片方の眼を失明した学生がいましたから治療代も必要です。当時のお金で100万円は要するというので、写真集を持って先輩のところに行って報告し、紛争についての理解を深めてもらい、かつ寄附をいただくということをしました。この写真集は好評でしたので、増刷しました。私の会計学の本なんかは初版で終わってしまうのに、これは何回か増刷しましたから、手術代も出すことができました。

このように、学院も社会的責任としての入試を必死に実行しました。こうして2月7日に異常入試が始まりました。写真左側は、入試を実現しようという学生が行進しているところです。右上の写真は、左に全共闘、右に機動隊がいます。ジュラルミンの盾を持っている機動隊が守りながら、全共闘はヘルメットをかぶり鉄パイプを持って応戦しようとしています。右下は、機動隊に守られながら受験生が試験会場に向かっている写真です。

※入試を死守する / 1971 卒業アルバム



学院正常化を求める声 / 1971 卒業アルバム

機動隊に守られての入試



※入試会場となった体育館前の混乱 / 1970 商学部卒業アルバム

向こうに体育館が見えていますが、旧学生会館前にいっぱい学生が集まっています。入試会場付近に全共闘、受験生、その他の人が集まり混乱している様子です。2階のベランダにこんな形で学生があふれている様子も見ることがないですね。このように非常にややこしい緊迫した状況で入試が行われたのです。

(2) 封鎖の一時解除

入試期間中は機動隊員が2,500人も来て、2月9日の朝に学内の封鎖を強制解除しました。ところがそのときは第5別館が拠点になっていましたから、全共闘の学生は第5別館に立てこもり、石を投げたり火炎瓶を投げたりして徹底抗戦を行いました。やはり機動隊は強いですから翌日にはまた封鎖を解除します。それでわかったのですが、全共闘は校舎を壊すわ、書物や火炎瓶は散乱させるわで、校舎は大変な惨状になっておりました。

私たちが作った写真集は、今回パワーポイントにすることができていないのですが、第5別館の中がぐちゃぐちゃになっているところとかを掲載して、それで先輩たちに見てもらったということがあります。

(3) 紛争(闘争)の泥沼化

これで紛争はいよいよ泥沼化していきました。しかも入試が終わったら機動隊は帰ります。気の毒に機動隊も大変ですよ。全共闘の学生を乱暴に扱ったら批判されますし、反対に全共闘は思いっきり石を投げたり火炎瓶を投げたり無茶をするわけですね。それでも全共闘は何も言われぬ。日本は被害者が守られず加害者が守られる国やなとつくづく思いましたね。機動隊がいなくなったらまた全学封鎖が行われて大学は授業ができず、休講になってしまう、こういうことがいたちごっこのように繰り返して行われました。



※小宮院長追求集会 (1969. 2. 26) / 1971 卒業アルバム

そういう中で2月26、27日に中央講堂で全学集會が行われたときの写真です。小宮先生は院長であり学長代理なんですが、それに対して機動隊導入の責任を追及する集會が行われました。ドクターストップが出るまでの22時間、小宮先生はほぼ丸一日、大衆団交に応じられたということになります。写真は見にくいでしょうが、真ん中に小宮先生がお一人立っておられて、その周りを大勢の全共闘学生が取り囲んで

いる。前列の方には全共闘の学生がいっぱいゲバ棒みたいなものを持って陣取ってるんですね。私なんかは一番後の方にいました。あまりひどいから何か言おうとしたらすぐに鉄パイプを持った学生が横へ来ておどすわけです。だから結局何も言えないんですよ。そのときは一般学生には物を言わさなかったのです。全共闘の独善的体質がよくわかりました。

様子を見てみると、小宮先生の後から小宮先生のアキレス腱のあたりをポンポン蹴っているんですね。痛いでしょうし、疲れますよね。もちろん体力が弱ってくる。22時間もよく耐えられたと思うのですが、ついにドクターストップとなりました。このときの全共闘は一方的で、

自分たちの意見しか正しくないという態度でした。今から言うとイスラム国に近いなと思うんですが、さすがに命をとるということにはなかったです。ただ、私がこの全共闘学生に電話して話し合いしようと言ったら、そんなことはしない、あんたの命も保証しないからねと言いました。言うだけだったと思うのですが、一方的過ぎるというのはそのとおりだと思うんですね。学長代理の小宮先生の言うことを絶対に聞き入れなかったですね。とにかく全共闘は小宮先生から何か一言でも引き出そうと思ってますし、そのためにはどんな手段をとってもいいぐらいの感覚で臨んでいたのですね。小宮先生はよく耐えられたなと思います。こんなことですので、とにかく私などは全共闘を信じることはできなかったです。

(4) 紛争（闘争）の傷跡

紛争で封鎖が行われて卒業式をしようにもできないので、結局8月の炎天下で仮の卒業式が行われました。これには2,000人ぐらいしか集まらなかったですけども、それでも紛争が終わったこの時期によくこれだけ集まったなと思います。

紛争が終わって悲しかったことの一つは、校舎がめちゃくちゃになっていたことです。研究室でも全共闘寄りの先生の研究室は無事ですが、そうでない先生の研究室は破壊されてめちゃくちゃでした。本などもどうなっているのかわからないような感じですね。自分たちに反対する立派な先生は全部暗殺リストに名前を載せるんですね。時計台前のヒマラヤ杉は関学のシンボルなのに切り倒されていました。こうなると狂気の沙汰で、このあたりからは関心が薄かった一般学生もさすがに気づき始め、全共闘についていったらあかんわということになりました。そんなの初めからわかっていたのに、流行病みたいなもので、そちらの方が何か知的で格好よく見えたのでしょうかね。右翼はあかんけど左は格好いいというような時代だったですね。ですから、最初は全共闘についていった人にも、やはり本質が見えてきたんです。ヒマラヤ杉を切り倒すなんて、それこそ愚の骨頂だと思うんですね。私なんかも情けなくて涙が出ましたね。シンボルのヒマラヤ杉を切り倒されて大変だということで、皆さん涙して、これでやっと気がつくようなことでありました。

両方とも切り倒されたうち、時計台に向かって右の方のヒマラヤ杉が切り倒されている写真(左下)です。切り株に文字がいっぱい書かれています。このような形で記念に活用した部分もありました。

右下の写真は炎天下で行われた真夏の卒業式です。1969(昭和44)年8月3日ですね。大勢帰ってきました。このときは服装は真っ白ですね、やっぱり暑いですから。



切り倒されたヒマラヤ杉の切株



真夏の卒業式 / 1969. 8. 3

4. 正常化への歩み

(1) 小寺学長代行の就任 (1969年3月19日)

小寺武四郎先生が学長代行に就任されてから、やっと正常化への歩みが始まります。3月19日には「廃校か否か」を問うアンケートが出されました。新しい大学の創造に向かって、非常に衝撃的な名称のアンケートでした。まさに廃校になるかもしれないという、関学がなくなるのかというような、そんな衝撃的なことなんですね。にわかには信じられないけど、それほど深刻な事態であったのは確かなことで、これについては94%が封鎖反対という反応を示しました。全共闘を支持したのが僅か6%ですから、圧倒的多数の学生は封鎖反対です。

新入生のオリエンテーションなどもキャンパスではできないんですね。ですから、学部ごとにそれぞれ山の方へ行ってみたり、海へ行ってみたりしました。商学部は関西汽船で新入生オリエンテーションを行いました。私は3年生から4年生のときですから、自分では船には乗らないんですけど、守りに行きました。関西汽船の船のところから新入生が乗って行くわけですが、そこへも全共闘がやってくるので、それを阻止しないといけないからです。船が出てしまったらもう妨害しようがないですね。ですからぐるっと何時間か海上を回って帰ってくるということで、船上オリエンテーションが行われたのです。

経済学部は、大阪城公園に集合してどこか山の方へ行きました。なぜ大阪城公園に集合かと聞くと、大阪府警が近くにあるからということでした。ほんまかいなと思うんですが、何かあったらすぐ警察を呼べるとか言っていました。とにかく、ばらばらではありましたが、それぞれの学部で一生懸命工夫してオリエンテーションをしたということです。

外人部隊が多いという話をしましたが、商学部に青木倫太郎先生という非常に著名で、関学が大好きな会計学の先生がいらっしゃいました。封鎖されている商学部に向かって青木先生が歩いて行って授業をしようとされるんですね。ところがヘルメットの学生は、青木先生が「わしは商学部の青木や」と言っておられるのに知らないんですね。これは、うちの学生と違うわと思いました。青木先生を知らない商学部の学生はにせものに決まっていますからね。これはえらいことや、ここには関学生でない人がいっぱい入ってきて関学を潰そうとしていると思いました。ますます関学を守らんといかん、こんな人に潰されたらかなわんと思いましたね。

(2) 「関西学院大学改革に関する学長代行提案」の発表 (5月7日)

そして、いよいよ学長代行提案が公表されました。5月7日です。これができるまで、随分長く時間がかかったのですね。

(3) 学院正常化運動の展開

さきほど述べましたように、私は学生として関学革新評議会という学生の団体を作り、主に体育会の多くの学生、文化総部の一部の学生、それに会計研究会の学生がたまたま集まって活動していたんです。一般学生に対して、ノンポリであってはいけない、一般学生に立ち上がろうと呼びかける運動などを展開しました。ビラを作成してそれを学生の自宅に郵送して注意喚起したり、大阪駅前でも24時間ハンガーストライキをして新聞に載る努力をしてそれによって学生に訴えようとしたりしました。24時間ハンガーストライキは、水も飲めないのなら大変やなあと思っていましたが、水は飲んでもいいのだそうです。とにかくさまざまな運動を展開しました。

ところがこの期間が長いものですから、さすがに私も、学院は一体何をしているんだろう、

学院の主導層は何もしてないのと違うかとかと思い始めました。何の広報もなかったものから。学生である我々の活動はそれなりに成果を上げてきたので、小寺先生と私ともう一人の学生の計3人で、六甲山あたりにあった小寺先生の別宅みたいなところで話をする機会が一度だけありました。私は小寺先生に、早く何とかしないと学生もいらいらしてて、そのうち大学に理解を示している学生もダメになりますよと迫ったのです。そうしますと、小寺先生はちょっと待ってくれとおっしゃる。いま用意している、ちゃんとやってるからと。その一言を信じるしかなくて、信じた後、結局、学長代行提案が出てきたのです。びっくりしました。後で言いますが5万字という、すごいものが出てきたんですね。これは今見てもすごい改革案です。一部に学生が学費を決めるとかできそうにないことが書いてありますけれども、それはそれとして、ようやく改革案が出てきたのです。

この頃、同窓会が母校を守る会を展開されたり、教職員が関学を守る会を作ったりと、一生懸命頑張っている同窓とか教職員もいました。学生にももちろん、手前みそですが、私たちの関学革新評議会のような組織がありました。関学革新評議会という名称ですが、これは当時「革新」をつけないとまともに扱ってもらえなかったんですね。右寄りと見たら途端に相手にされないような風潮があったので、とにかく新しいことをちゃんとしていくという意味で革新にしたのです。別に超左翼だから革新ということではなかったんです。最初に言いましたように、同窓会に行ったら、おまえら左かとかよく言われましたけど、そうじゃなくて、関学を変革していく、変えていくという意図を込めてつけたのです。

関学革新評議会の活動を展開していても、結構怖いことがありました。他の大学のように内ゲバを起こしてはいけなかったので、体育会の学生、特に空手部や拳法部やボクシング部には、絶対に武器を使うなと注意していました。彼らにしたら素手も武器ですからね、それを使ったら終わりやから、絶対使うなと言っていたのです。では、武器をもっている全共闘から自分たちをどう守るかという、お腹に週刊誌を入れて、それをさらして巻いて鎧のようにして、鉄パイプで突かれてもここは大丈夫なようにしたのです。問題は頭です。ヘルメットをかぶったら他大学の場合と同じ状況になるからここは手で守ることにしました。その結果けがをした学生がたくさんいたわけですが、それくらいしか武器をもたずに守る方法はないのです。我々は武力じゃなくて言論でいこうということでやっていましたが、確かに怖かったです。

関学革新評議会などは、まず大学周辺の下宿を借りました。旧高等部の方にある下宿屋さんですが、そういったところは裏の窓を壊したらすぐに入って来れるんですね。棒でたたいたらすぐにガラスを破って入って来れる、これは危ない。上ヶ原温泉の風呂屋さんの2階を借りたり、そうこうしているうちに最後はとうとう、うどんすきの美々卯の薩摩さんの別邸が仁川にあり、木造の平屋建てのところを貸してあげると言ってくくださったのです。そこは民家だから全共闘が入ってきたら警察呼べるからと言って貸してくださったんです。冷蔵庫には野菜入れといたる、米入れといたるから食べていいと言ってくくださったんですね。ただし、命は自分で守れということです。あの場所は裏はどうも逃げられないので、塀を乗り越えてどこかに逃げろというわけですね、それから、建物は木造やから燃えるが、火炎瓶を投げられて燃えても、火災保険に入ってるからかまわないので、その点は心配するな、命だけは自分で守ってくれ、ということで3カ月ほど貸していただき、そこを拠点にして活動しました。

体育会の学生は人数も多く組織だっていますから、1万人の学生に宛名書きするのは1日のできるんですね。みんなに手分けして各部に手分けして、ここやってと言うたら、はいと言ってやってくれて、次の日になったら封筒に手書きで宛名書きされたものができてくる。当時、

学生名簿がありましたから、そういうことができるわけですね。今はそんなものありませんのでできませんが、そこで何回か一般学生向けに関学の改革案などの文書を作成して送りました。改革案の中には関学の財政や、公認会計士監査を入れるべきだといったことを初めて書いたのですが、だからかどうかは別として、後に関学が日本で最初に公認会計士監査を受けることになったという出来事もありました。その他いろいろな提案をしたりしました。それがどれほど採用されたか検証も何もしてませんが、学生は学生なりに提案して、単なる全共闘反対だけではなくて、前向きな議論をしようということでやったわけですね。徐々に全共闘よりもそちらの方が一般学生に理解されるようになりました。

(4) 改革結集集会（6月9日）



※改革結集集会 / 1971 卒業アルバム

1969年6月9日、この日は忘れられません。武者震いしながら王子公園へ行きました。言わずと知れた学院発祥の地、王子の陸上競技場で「改革結集集会」が行われたのです。ここで1万人が小寺改革案を支持しました。写真で、左に立っておられるのが小寺先生です。この集会には大勢の学生が来ました。同時に、また全共闘が入ってきて混乱し、ここでけがをした先生方もいらっしゃり、職員の人もけがをされたかもしれませんが、

とにかく大変な騒動でした。全体としては、このときに紛争反対の意思を皆で確認することができたのです。そして、ようやく授業再開にこぎつけたのです。

(5) 授業再開（6月14日）

6月14日、キャンパス開放集会ということで、5,000人が4カ月ぶりにキャンパスへ復帰しました。それまで封鎖されていたので、キャンパスの中を歩くことはできなかったのです。



キャンパス開放集会



※バリケードに使用された椅子と机
/ 1971 卒業アルバム



解放集会の後清掃作業をする学生たち
/ 1969. 6. 14

左上の写真は時計台の前ですが、キャンパス解放集会で小寺先生が新聞記者の方々から取材を受けておられます。時計台を見ると、落書きされた造反有理という文字がまだ消えていません。真ん中の写真は、時計台のほうから見た銀座通りです。椅子や机やいっぱい放り出されています。むちゃくちゃな状況です。右上の写真には私の友人が写っていますが、先ほどの造反有理という文字をまず消そうとしているところです。ほぼ消えていますね。

6月14日以降、いよいよ授業再開です。本当は4月からなのに6月からですから、夏休み返上で授業をしないとイケない。けれどもちょっとだけ短い夏休み期間も設けられました。夏の授業は大変です。冷房はありませんし、教室の中は荒れ果ててますから、椅子もないところがあり、床に新聞紙を敷いて座るなど、とんでもない状況の中で、暑い暑いと言いながら授業を受けました。右の写真は新聞紙を床に敷いて授業を受けているところです。この姿勢では授業のメモをとることもままならない状況でした。でも、このときは授業を受けられる幸せを味わっているわけです。



授業再開／朝日新聞／1969. 6. 16

II. 大学改革

1. 学長代行提案の意義と内容

(1) 学長代行提案の発表、提案の骨子

写真の左には、5月7日に出された「関西学院大学改革に関する学長代行提案」の表紙があります。その右には「廃校か否か」のアンケート用紙があります。学長代行提案は責任の所在をはっきりさせるという意味で小寺先生のお名前で出されたわけです。5万字に及ぶ大提案です。以下、その骨子です。



学長代行提案／討議資料

「廃校か否か」／アンケート用紙

- ① 関西学院大学における大学の理念
- ② 教育の改革と問題点
- ③ 研究体制改革の展望
- ④ 大学における意思決定と管理
- ⑤ 法人組織における意思決定と経営
- ⑥ 職員の役割と事務の合理化
- ⑦ 学生の自治と参加
- ⑧ 学生の諸要求に対する大学当局の見解
- ⑨ 改革に当たって各層、各界への要望
- ⑩ 改革の実現に向かっの具体的展開

こういった項目が並べられて、しかもそれぞれについてかなり突っ込んだ議論がなされています。今読み返しても、かなり価値のある文章だと思います。放っておいたら忘れますから、どこかでまた点検作業をしないとイケないと思うのですが、誰がいつしたらいいのか、私の学長時代は通り過ぎてしまいましたので、次にどなたかに、あるいは現在でもいいんですけど、とにかくどこかでやらないとイケないなと思っています。この学長代行提案には、今読んでも非常に有益な記述が見られます。もっとも、学生が学費を決めることに参画するというのは、どうも私などは賛成できないのですが、今ガバナンスの問題とかを議論するにあたっては、これは今でも非常にいい討議資料になると思いますね。

2. 改革に向けての試み

(1) 広報活動の展開

先ほども述べましたように、その当時、広報活動が足りなくて、卒業生の方々がいらいらしているという状況がありました。学内でも同じでした。学生もいらいらしてたということで、広報活動が非常に重視されて、いろんな媒体がつけられました。上ヶ原ジャーナルは速報性の

高いガリ版刷りの資料です。それをきちっとまとめたものが定期的に Campus Record という形で出されたり、KG Today という新しい冊子が出されて、割と広く配布されるようになったということで、現在はかなり広報媒体がありますけれども、紛争後に広報についても努力されたのです。

(2) 改革のための諸委員会の設置

とにかく改革を進めるには、委員会を設置して頑張らないということで、いろいろな委員会ができました。大変だったと思います。

(3) 改革推進日

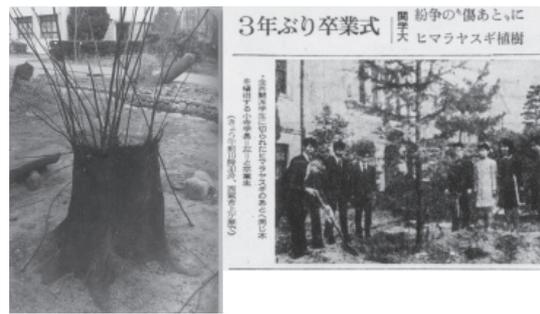
これは新しい試みです。改革推進日は土曜日に集まりました。月曜日から金曜日まで授業を頑張り、土曜日は改革のことを考える日にしようということで、毎土曜日、テーマを決めてみんなで議論をしました。当初はもちろん学生も熱気むんむんで大勢集まっていたのですが、1年ほどすると改革の議論も飽きてくるというので、学生の参加も減ってきました。しかし、それなりの成果も上げたというので、今度はこの日にオープンセミナーをしたりしました。土曜日の活用の仕方としては、当初はもちろん改革推進日でよかったけれども、その後も土曜日を一般の授業にしてしまうんじゃないかと別の企てをするということで、関学としては特色のあるいき方をしたんだと思います。

3. 改革の内容

改革の内容を見ると今現在につながっていることがよくわかると思います。

- (1) 「学生参加の学長選挙」です。これも行き過ぎるといけないと思いますが、現在、学生は拒否権があるということで、少し学生が参画できる学長選挙をしています。
- (2) 「オフィスアワーの実施」はこのとき始まりました。
- (3) 「COD (Campus Organization Development、キャンパス創意開発機構) の開設」、これも今、活用されていますが COD って何やろうな、キャンパス創意開発機構と聞いてもあまりわからなかったの、私、応募してみたんですね。何か苦情を書けと、言ってしまうば苦情処理箱、目安箱ですね。これを書いたら回答が来るんです。偉い先生が懇切丁寧に説明してくださるので申し訳なくて、それ以降、私自身は書くのをやめました。私を書いて、こんな偉い先生にこんな苦勞をさせるのは嫌やと思ったのです。しかし、それでは趣旨に反するんですけどね。総じて COD はよく活用されて、ああしてほしい、こうしてほしいと、学生の単なる苦情もありますけれども、積極的な前向きの提案もあるということで今もこれは生かされていると思います。
- (4) 「オープンセミナーの開催」もされるようになりました。それから大事な点ですが、
- (5) 「総合コースの実施」。その頃、学部の垣根はまだどの大学でもとれていないのですが、学部の垣根があるのはよくない、低くしましようという発想から総合コースが生まれました。学部は今もありますけれども、総合コースで学部を越えてとれる科目を設けることになり、今も生かされているところです。
- (6) 「助手制度の改革」。助手と院生と二重身分でややこしかったし、しかもその二重身分の人が紛争を起こしたりしたので、それはやめようということで助手制度が改革されました。改革により新しくスタートした仕組みですが、これは今に生きています。

3年ぶりの卒業式です。ヒマラヤ杉が切られましたので、朝日新聞に載った70年の3月、私の卒業式の日ですが、小寺先生が小さな新しいヒマラヤ杉に土をかけておられます。周りに各学部の代表の学生が立っています。手前みそですが、右から4人目の男子が商学部代表の私です。その木を挟んで左側に立っているのが、経済学部の富田君で、いま中央大学の教授です。こうして新しいヒマラヤ杉を植えたということになります。



ヒマラヤ杉の植樹／朝日新聞／1970.3.28

大学紛争は全国的でありましたから関学だけの問題ではありませんし、非常に真剣に大学紛争に取り組んだ、私の立場とは逆の立場の学生もいるので、それは尊重したいと思います。そんなことで、私としては中には尊敬する全共闘学生もいましたけれども、多くの学生は、試験になるとさっさと試験を受け、就職活動となると身だしなみを整えて、スーツを着て企業の面接を受けに行くという、何とも変わり身の早い人たちを見ました。その人たちにとっては大学紛争はお遊びで、戦争ごっこをやったんだと思います。よくもそんなことで、私たちを振り回したなという思いでいっぱいです。

一方で、大学はそんなことに振り回されてはいけないわけです。同時に、この紛争で学校は変わらないといけないということを強く感じました。私の目から見てずっと何の変化もない関学でした。内部にいた先生方はいろいろ変革を感じられたのかもしれませんが、学生としての私には、関学って変化しない学校やなど、10年間少しも変化しないと思ったような学校でした。それは学生からすれば、学校が怠慢だと映ったりしたかもしれません。世の中がこれだけ変わってるのに、関学は全然変わらない。私は学生なりに、関学をもう少し改革に取り組む大学にしないと沈んでいくよと思いました。ですから、その後も私自身はしんどいけれども変革を望んできました。停滞してたらいかん、じっとしてるといことは沈んでいくということを意味するので、やはり変化し続けないと飛行機と一緒に飛ばないんですね。ですから、変化すれば失敗することもあるけども、新たな試みでやっていかないといけない。それが、この紛争を通じて学んだ一番大きなことです。

それと、やはり信頼関係が非常に大事です。関学のような学校、それまで本当に規模的にも小さかったからかもしれませんが、とりわけ教職員の中に、非常に穏やかな雰囲気信頼関係が醸成されていたと思います。もちろん先生と学生との間にも信頼関係は色濃く続けられていたと思います。けれども、規模が大きくなると、ややもすればそれは薄れていきます。教員の間でも、あの人知らんわという人がたくさんいらっしゃるわけですね。そういう意味では、昔と今では同じ関学といっても随分変質していると思うのです。

ですけれども、関学の場合、幸いなことに理念がはっきりしている、あるいはもっとはっきりさせようとしている、この点は努力していますね。ですから、本当に強く感じるのは、関西学院は幸いなことにキリスト教主義の中で、建学の精神が言葉としてもはっきりしているし、それを一生懸命考えるという姿勢がはっきりしているの、生きていけるんだと思います。これは教員も職員も学生も共通して持てるし、同窓になっても持てることですから、大事にしていけないといけないことだと思います。紛争のときでも、そのことは失われなかったはずだし、かつての訓令12号のときはそれが危うくなりましたが、それでも乗り越えました。

第二次世界大戦のときも、神学部がなくなるかもしれない状況におかれましては、国によって無理矢理改組もさせられたわけですが、それでも学内の意識としては神学部は続いたのです。また、大学紛争は確かに泥沼化しましたが、キリスト教主義の精神に揺らぎがあったかという、そんなことは全然感じなかった、そういう意味ではまだそんなに深刻ではなかったかなと思います。戦争ごっことしての紛争を面白おかしくやった人はいますけれども、その中で関西学院はさらに次の時代に向かって生きていくという決意をし、かつ建学の精神を守り抜くということをやり返したという意味で、この経験は生きたと思います。

そして学長代行提案というすばらしい改革案が作成されました。内容的には、ちょっと読むとおやっというところもなくはないのですが、これほどの努力をされたというのは非常に尊敬に値すると思います。私が学長のとき、じゃああなた5万字で改革案を作成してみろと言われてたら、1人で書くのではないにしても、簡単にできることではなかったと思います。本当に捨て身でやらないとできない。こういう作業を小寺先生を中心とした先生方がなされたのは、ものすごいことだと感じております。

そういった意味で、大学紛争というのはまだ終わったわけじゃなくて、その紛争がまだあると同時に、差別問題をはじめ新たな課題も次々と出てくるんですね。関学として取り組む課題がいっぱい出てくる中で、この大学紛争はやはり関学の歴史の中でも1つの大きな苦難のときだったと思います。それを皆さんの努力で乗り越えられた、私はそこを学生として暮らすことができたということです。私自身も3年生までは夏休みにはアルバイトなどしていたのですが、4年生になったらそれをやっているときではない、関学には中学部からずっとお世話になってきたのに、最後にわけがわからない学生生活で終わることはできない、ここはアルバイトで夏休みを過ごすわけにはいかんと思い、一生懸命大学紛争の解決に学生として身を投じたという自負もあります。その意味で、紛争について話させて頂くことを引き受けさせていただいたのです。

十分な話ではできませんでしたが、この後、少し時間がありますので、皆様方のご意見などをお聞きできればと思います。よろしく申し上げます。ありがとうございました。

*なお、今回の講演にあたり、参考文献として『関西学院百年史 1889 - 1989 通史編Ⅱ』を中心に事実を確認しました。それから100周年の写真集『関西学院の100年』の旗の章「粉碎か創造か」の写真の一部転載させていただきました。また最近、商学部では『世の光たれ！ - 関西学院高等学部商科開設100周年記念誌』を作成しました。そこからも写真を借用しました。私たちの関学革新評議会の写真集『苦悩』からも取り入れたかったのですが、私の時間と技術能力の関係でそれはできませんでした。手伝ってもらってようやくできたのが、本日のパワーポイント資料です。